

2010年1月7日から私たち夫婦と友人Aの計3人で6日間の台湾観光に行った。観光しながら他国の規則、恩恵に触れた小文である。台湾通の人には、既知のことばかりだし、ほかの国々にも似たような仕組みがあると思う。

### ✿入国時のつまずき

家にあった残り物のリンゴ3つをディバッグに入れて、飛行機に乗ったのがよくなかった。貧乏性の私は旅行中にリンゴが傷むより、道中で食べてしまおうと思った。

台湾に果物を持ち込んではいけないことは知っていたが、当局を甘く見て、ナーニ、何事もなく通過できるだろうと考えていた。台湾到着後もリンゴを背中のバッグに入れたまま台湾の表玄関である桃園飛行場で入国審査を受け、手荷物受け取り場所からトランクを引き出し、そっぴ、外へ出る前に両替をせねばとあと少しで出口なのに、90度進路変更して両替所に足を向けたのが運の尽きだった。太もものあたりに柔らかい物を押しつける感じがするので、何だろうと見下ろすと…愛想のよい犬(ビーグル犬か)がなれなれしく伸び上がり、しっぽを振って私に挨拶。そして犬の首紐を握っているは紺の制服、すらりと格好の良いお嬢さん。

「フルーツを持っていませんか？」

と物腰柔らかく問われた。

その場ですぐに観念し、「有ります」と言った。ディバッグをあけてりんごの入ったビニール袋を彼女に差し出した。それから「不要、不要」と鷹揚に手を振り、欲しければあげるよと意思表示をしたが、受け付けてもらえず、私は建物の隅にある横に長い番台のようなところへ連行されてしまった。

そこには男の役人がいて、私を連行した女性検疫官はなにやら申し送りをした。「捕まえたわよ」とビーグル犬の手柄を報告しているのか。

この時点ではりんごは捨てればいいでしょ、と軽く考えていた。

係の男はハカリでリンゴ3個の総重量を計った後、英語は分かるかと聞いてきて、私ができないというと日本

文で印刷した警告書のようなものを出し、これを読めという身振りをした。次にメモ用紙に「罰金、3000台湾元」と書き、私が読みやすいようにその紙を180度回して、意味を理解するか確かめた。ありゃ！罰金だ。

そうしているときにも、私と同類の台湾人がまたもや犬の精勤によって連行されてきて、係官はそちらの対応に行ってしまった。台湾人の成り行きを横目で見ていると、一山いくらと思える小さいリンゴ数個を没収されて、納得できないのかなにやら叫んでいた。私を差し置いて台湾人の処置を先にはじめた。文句は言えないが係官様、早くこっちへ戻って書類を作ってくれ！

時間はのろのろと進み、私はあせった。予定では速やかに飛行場を去り、台北行きのバスに乗る。台北からは電車を乗り継ぎ、今夜宿泊の「九份」という観光地までバタバタといく。順調なら宿に荷物を置いて暗くなる前に街並みの見物もしよう、と目論んでいた。しかし自分の不注意で足止めだ。検疫係官はこちらに戻るとパスポートを調べて名前を記入したりして、裁定書類をつくり始めた。覗き込むと複写用紙に台湾の漢字である画数の多い「繁体字」で書き込んでいる。この時はわざとゆっくりするための仕掛けが繁体字のように思った。

やっと書類が整い、罰金を払うところまで進んだ。その場で払うものと思ったので、台湾紙幣の持ち合わせがないというつもりで「マネーチェンジ、マネーチェンジ」と訴えだが取り合ってもらえず、彼に連れて行かれたのは行きたかった両替所。それも「台湾銀行」に限らしい。両替所と罰金支払いは同じ窓口なのだ。窓口で払い込み票(左下図)を出して支払いを済ませ、やっと放免となった。成り行きを見ながら待っていた2人には1時間も待たせてしまい、迷惑をかけた。桃園飛行場ではリンゴはだめという次第。規則は守らなければいけません。

このつまずきで台北駅での接続が悪くなり、下車駅「瑞芳」に着いたのは夕暮れも迫っていた。タクシーで「九份」まで行くと観光客相手の商店街はほとんど閉まっているし、雨も降ってそぞろ歩きはできなかった。

翌朝も雨。それでも「九份」の商店街を冷やかしてあるいた。路地が蛇行する屋根つきの商店街は、紅色の中華カラーが基調。ときおり中国人団体客がにぎやかに群れたり、台湾人の若者グループが行き交った。みやげもの屋を覗き歩くと、早くも出立の時になってしまった。

### ✿台湾の罰則や公共料金

帰国してから調べると2008年に検疫規則が改正となり、禁止、あるいは制限されている荷物は没収だけでなくその場で3000(1万円弱)～1万5000台湾元まで



罰金の払い込み用紙、もう一枚「行政院農業委員會動植物檢疫新竹分局裁處書」という書類ももらった。



坂の多い「九份」街並み

の罰金を徴収することになった。

台湾には2009年に制定した「煙害防止法」というものもある。ホテルやレストランなど公共の場所での喫煙を禁じる法律で、違反者には最高で罰金1万台湾元(約27,000円)。取締りには密告者からの通報も受け付けるというから、ちょっと怖い。密告が日常の蒋介石時代に逆戻りだ。

今回の旅行で我々が泊まった花蓮民宿の日本人オーナーは、煙草を吸うときは屋外軒下に椅子テーブルを置き、新聞を読みながら紫煙を吐いていた。これは自宅が公共の場所なので室内で喫煙できなくなった結果らしい。

別の町で入った小さな軽食堂の壁に、お役所配布と思われる「禁煙警告ポスター」が貼ってあった。しかし、ポスター下の床には吸殻があちこちに落ちていて、お客さんが吸うのは勝手に店は関せずというところか。私は煙草を吸わないので歓迎すべき規則だが、なかなか厳しい。ほかの店でも煙草の煙を浴びたので、この規則は完全に機能していないとの感じを持った。

歓迎すべき規則は、「敬老」料金だ。台湾の新幹線「高鐵」は65歳以上は外国人でも敬老料金適用で距離曜日に関係なく半額になる。国営の在来線「台鐵」もやはり半額だが外国人には適用されない。日本にはJRの敬老制度に「ジパング」という姑息な割引制度があり、年会費を

取って3割引、盆暮れは不可とお上感覚だ。すっきりと65歳以上半額になれば、旅行する人もずいぶん増えて、経済効果も広がると思う。高速道路無料化などより環境と人間に優しいはずだが、日本は65歳以上の人口が多すぎて割に合わないのか。私は65歳になっていないけれど、順調に齢を重ねたときのための遠吠えである。

### ✿三義木彫博物館

「九份」～「花蓮」と日程を消化して台湾の友人、「許」さんを訪ねて「台中」へ行った。台中では許さんの立案で苗栗県の「三義木彫博物館」に案内された。台中から車で30分ほどだ。この地方は日本統治時代は樟腦の精製地で、原始林のクスノキを伐採し尽くした。あとには大きな切り株がたくさん残った。この切り株にシロアリが巣くって面白い造形ができ、む、これはものになるぞとひらめいた人がいた。これが三義木彫のきっかけという。近年は先鋭造形家が作る芸術的にも優れたものができる、近くには木彫を職業とする人たちの一大芸術村が出現した。大通りには木彫屋が軒を並べ、独特の商店街を作っている。

台湾で起業をする人はここ三義で必ず縁起物(布袋とか竜、トラなど)の彫刻を買い込み、店や事務所に飾るそうだ。

1990年台湾政府が木彫産業振興のため設立したのが「三義木彫博物館」で、すばらしい木彫群が展示されている。入場料は大人80台湾元、ここでも65歳以上無料の「敬老制度」があり、65歳過ぎのAさんはパスポートを見せて無料となった。おもしろいのは身長が120cm以上ある子供の付帯規則で、学齢期前でも50台湾元を払わなければならない。私が思うに、うちの子はまだ学校に行っていないとシラをきる親に対抗した制度か？客車の通路に「背比べ」に使うような目盛りが刻んであり、これをオーバーすると学齢期前の子供も「小人」料金が適用される。似た制度はほかの国にもあるようだ。

日本でもこの制度に似たのを見たことがある。それはとある日帰り公衆温泉。脱衣場の入り口に身長を調べる

目盛りがあり、それを越えた男の子は母親と女湯に入れない。女の子は父親と男湯に入れない。無用のトラブルを避ける取り決めと思われる。

今回は、台湾のりもの印象ほかを予定。

(この項終わり)



三義木彫博物館(写真左)と、玄関にある「ゾウ像」(写真右)。加工無しの自然木というから驚き。この像は対になっていて、別の「ゾウ」が玄関の反対側にもある。